

超越の意味作用を問う
—レヴィナスにおける「痕跡」概念の展開—

早稲田大学 藤本崇史

序

本論文の目的は、エマニュエル・レヴィナスにおける「痕跡 (trace)」概念の展開とその意義を示すことである。痕跡という、絶対的に〈他なるもの (Autre)〉の過去性に纏わる重要な概念は、論文「他者の痕跡」(1963 年)において唐突に現れてきたわけではない。『著作集』編者のカランとシャリエが正当に指摘するように、『全体性と無限』(1961 年)前後の彼の課題は、何よりもまず「存在の彼方への超越こそが究極的な意味作用 (signification)¹であり、その他の意味作用は全て超越から出発して《意味すること (signifier)》を受け取る」(CE2, 36/33)という事態を示すことにあり、この際に「痕跡」が既に術語として用いられている²。したがって「痕跡」概念の展開を追究することは、存在の彼方への超越の意味作用を問うという、この時期のレヴィナスが最も重視した問題系に取り組むことに繋がるだろう。

「痕跡」概念を中心的に論じた先行研究として上田 (2001) が挙げられるが、これには二つの問題がある。それは第一に、成熟した痕跡論が展開された「意味作用と意味」(1964 年)に専ら依拠した分析が為されるため、「痕跡」それ自体が如何にして導出されたのかという視点が欠けていること³、第二に、「意味作用と意味」を論じる際に『存在の彼方へ』(1974 年)の議論が援用されるため、著作ごとの自律性が担保されていないことである。故に超越の意味作用を問うという、彼の関心に即した考察が十分になされたわけではない。

これに対して我々はレヴィナスと歩みを共にしつつ、「痕跡」概念の展開を丁寧に追うことで、この問いに向き合うこととなる。先取りすれば、彼は「顔」の過去性を強調するためではなく、むしろ「顔」の現出なき状況における超越の意味作用を考えるべく、「痕跡」概念を導入したのである。そして顔の過去性の強調については、「痕跡」概念の内実の変容に伴う思索の深化として捉えられるべきだと、我々は主張することとなるだろう。

本論において我々は、まず草稿「意味作用」(1961 年)を検討し、黎明期の「痕跡」概念の内実を確認する。次いで草稿「隠喩」(1962 年)の分析を通じて、意味作用と意味とが隔たった象徴体系としての隠喩に対するレヴィナスの関心を浮き上がらせつつ、「痕跡」概念との相違を明かす。最後に「他者の痕跡」(1963 年)を検討し、『全体性と無限』の「顔」の議論が痕跡論に組み込まれたことを確認し、ひいては「痕跡」概念の変容を示す。

1. 象徴体系としての痕跡 ——「意味作用」(1961 年—62 年)の分析

草稿「意味作用」で主に論じられているのは、顔が現出しない状況において、超越という「意味作用 (signification)」へと向かう志向についてである。この時点のレヴィナスは、意味作用へと向かう志向を、記号間の隔たりを通じて象徴関係として考えている。

それ故ここでの志向性は、はっきりと異なった或る構造を有する。すなわち志向性は、何らかの仕方で同一性と関係する思惟とは全く反対に、諸記号間の隔たりを通じて意味内容 (signification) を思念するのである。

こうして思考はその直線的な (en ligne droite) 傾向から逸脱し、この屈折そのものによって、まさしくこの象徴体系のこの弁別機能によってのみ接近される意味作用を描き出すのだろうし、この象徴体系において

は、或る記号は別の記号を側面的に(latéralement)⁴思念するのであって、意味内容(signification)自体を思念するわけではなく、象徴体系においては、直観のあまりに一面的な廉直さ(droiture)があらゆる瞬間に修正を受ける。象徴体系の素晴らしさはここにあるのであり、欠陥ではない。(Æ2, 359f./371)

意味作用へと向かう思惟のこの「志向性」は、通常の認識論的な志向性や、感覚論的な志向性とは区別される。認識論的な志向性であれば、直線的に対象へ向かうノエシス—ノエマ関係として解され、感覚論的な志向性であれば、与えられたヒュレーに対するモルフェーの直線的な意味付与(Sinngebung)として解されるべきであろう。

ところがこの意味関係における志向性は、「屈折」した「側面的」な関係であり、意味作用へと向かう思念は、記号間の隔たりを通じてのみ可能となる。この際、我々は意味作用／意味内容それ自体を直接的に思念したり、直観することもできない。つまり思惟は意味作用へと赴くことはできるものの、それは現出する諸々の「象徴」が示す意味を通じてのみ可能なのであり、その志向は「記号間の隔たり」を通じた「象徴体系」として考えられるのである。

たとえ〈他人(Autruï)〉が~~それ~~私にその顔を見せないとしても、世界への〈他人〉の現前(présence)はすぐさま私に関わり、私を思念し、{私によって予期的に探求される}。この予期(attente)は、まず諸々の記号自体を通じて表明される。{他人}が生み出す諸記号は、意味されたもの(signifié)へと、弁別的に他の記号へと単に送り返すだけではないし——他人の芸術作品は{単に}他人が作り出す世界へ{送り返す(renvoie[nt])}だけではないし、他人の~~ハンマー~~道具は他人が追求する実践的な諸目的へ送り返すだけではないし、他人の言葉は他人の観念へ送り返すだけではない。こうした諸記号は他人自身へと導く。他人の諸記号は——他人の痕跡であり、遺物であり、砂上の足跡である。痕跡が私を他人へと導く。(Æ2, 366f./378)

対面の状況にあらざる場合にも、他人の諸々の記号を通じて、その現前が私に与えられるのだとレヴィナスは考えている。ここで我々は、意味作用へと向かう志向が象徴体系に属すると捉えられており、他人の諸記号——遺された芸術作品、道具、言葉——が「遺物」や「砂上の足跡」と同一視された上で「痕跡」と呼ばれていることに注目しよう。つまりこの「痕跡」は他人の遺した文化的な記号であり、諸事物の痕跡を意味している。だがこうした「痕跡」の位置付けは、第三節で分析する論文「他者の痕跡」において大きく変化する。先取りして述べるならば、「他者の痕跡」において「痕跡」は決して諸事物の痕跡ではなく、ただの記号でもないと言明された上で、もはや超越の意味作用へと赴く思惟それ自体ではなく、その特殊な能意性(signifiante)として論じられることとなるのである。

文化的な記号は、いわば記号を配信する者の不在(absence)において配信される。{この不}在({Cette ab}sence)は必ずしも、通過の際に或る両義的な痕跡を残した者の実際の隔たり(éloignement)というわけではない。この不在は、あらゆる記号のいわば謎めいた、それ故に両義的な性格のうちにある。[後略]

ところで記号を用いる言語は、~~同時にあらゆる記号の乗り越えである。~~これは、自らが配信する記号をあらゆる瞬間に解錠し、自らの固有の体系と固有の文体を打ち砕くために、意味するもの自身がこの表明のうち

に現前するような、意味する仕方である。(Æ2, 368f./380)

続く箇所では、言語における意味関係が、文化的な記号と対比される形で論じられる。『全体性と無限』での「顔」は発話を介した他人の表明であり、意味するものたる本人が現出に居合わせることで、己の形態を絶えず解体すると考えられていた⁵。だが「顔」とは異なり、文化的な記号の現出に他人は居合わせることがない。記号の両義的な性格とは、何らかの意味をもつにもかかわらず、配信者が居合わせない以上、その意味が十全かつ一義的には示され得ない、というものである。故に他人の記号は「謎めいた」性格を有する。

かくしてこの箇所から、「他人の記号」の例として、芸術作品や道具と併置されていた「言葉」が、既に書かれたもの、或いは既に話されたもの、といった過去性を有することがわかる。対面の関係における言語行為については、発信者たる〈他人〉が居合わせることで、言説の意味を一義的に定めることが可能となる。だが、常に過去のものである「他人の記号」については難しい。意味は多義的なままであり、本当のところは謎のままなのである。

以上のように草稿「意味作用」を確認して明らかにされたことは、以下の三点となる。それは第一に、他人の「顔」の直接的な意味創設とは別様なる、超越との意味関係が「他者の痕跡」(1963 年)以前に構想されていたこと、第二に、本人がその現出に居合わせるもののない「他人の記号」として「痕跡」の語が用いられ、その過去性について触れられていること、最後に、この時点では痕跡＝「他人の記号」が芸術作品や道具を意味する「文化的な記号」であるが故に、「記号間の隔たり」を通じた「象徴体系」であると考えられるに留まっていること、である。

2. 象徴体系とは区別される痕跡 ——「隠喩」(1962 年)の分析

次いで我々は、翌年の講義「隠喩」を検討する。草稿に付されたメモの冒頭では、「隠喩とは意味／方向 (sens) の移転を指す」(Æ2, 323/335)と述べられている。これは講義の冒頭でも用いられ⁶、類比による関係付けには留まらない「思考の尺度の彼方」(Æ2, 328/340)を思考する可能性として、「超越、存在の上方、もしかすると神のような、或る幾つかの哲学的な語」(Ibid.)が「典型的な隠喩」(Ibid.)として挙げられている。それではこうした隠喩が生起する場は、超越の意味作用へと赴く思惟を可能にするものなのだろうか。

そして最後に、もし単純な或いは字義通りの意味が隠喩によってしか乗り越えられないのならば、隠喩が生起する場である言語は思考の単なる付録でも単なる道具でもなく、ノエシスからノエマへの志向性それ自体におけるよりも根本的に卓越した意味／方向 (sens) において、思考が自分自身の外に出るという独特の (originale) 志向性となるであろう。

{あらゆる志向性の彼方へと導く志向性があり得るかのうちに。}(Æ2, 329/341)

レヴィナスは言語それ自体が有する意味／方向 (sens) を、思考が自分自身の外に出る、と解した上で、これを卓越した独特の「志向性」として考えている。しかし他方で、隠喩それ自体は全き〈他なるもの〉を指示するわけではない。

とはいえ言語と意味作用の普遍的な隠喩性は、この事実そのものにより、隠喩の内に刻まれた超越の価値低下を証明する。隠喩において告げられる彼方さえ、言語にとっては完全に他である他性への移行を表すの

ではない、というのも文脈の外へ出ることはひとつの抽象となるからであり、まさしく隠喩の普遍性がこれを証明する。隠喩の普遍化は超越の断罪である。それ故に、隠喩は神とのパロールとはなり得ない。このような隠喩は、芸術——現実の超越ではなく戯れの超越——を復権させるだけである。[略]

Que-d' 言語や文化の能意性 (signifiante) とは別の {ある} 能意性の形が可能である {ではないのか} ? ——我々は実際そう考えるのだ。(Æ2, 337f./350f.)

超越や神といった「隠喩」は、思考が自身の外に出ることを可能にするものであり、卓越した「志向性」なのであった。他方でレヴィナスは、隠喩が文脈から離れた瞬間に、普遍や抽象という中立的なものに解消されることを問題視する。これはすなわち、絶対的に〈他なるもの〉である超越の他性が中立化されてしまう事態を招く。こうした展開を彼は望まない——これでは意味作用へと赴く思惟の検討が、『全体性と無限』において「他性の中性化」であると批判されたハイデガー存在論と同じものになってしまう⁷。故に我々を超越へと赴かせるのは、言語における「別の {ある} 能意性」であり、隠喩ではない。隠喩は「戯れの超越」である芸術の復権に与するだけである。だが彼は、言語が超越へと赴く可能性までも放棄するわけではない。

しかし非人称的に為される独り語としてではない言語——そして諸々の隠喩のうちで明らかにされる存在を語る言語——は、文化的ではない別の志向、世界を超えて〈他人〉へと導く或る移転によって引き起こされる限りで倫理的である別の志向を含んでいるのではないか。

意味作用

なぜなら存在を語る隠喩から出発するから

我々はここで、思惟は自らに馴染み深い意味の彼方へと運びうるのでは {ない} か、それは自らをと自問 [す] べきである。(Æ2, 339/352)

この草稿「隠喩」では、「痕跡」概念が直接的に論じられているわけではない。しかし我々は、先に見た「文化の能意性」ないしこの引用箇所「文化的ではない別の志向」という表現に注目した上で、レヴィナスにおける隠喩の問題を体系的に論じた Del Mastro (2013) の研究を参照することで、「痕跡」概念の扱いの変化の一端を示すことが可能である。この研究では文化的な志向、すなわち芸術や文化における隠喩を「相対的隠喩 (métaphores relatives)」、現実の超越へと我々を赴かせる隠喩を「絶対的隠喩 (métaphore absolue)」と呼ぶカランの表現を踏襲した上で、後者を可能にする唯一の形態が「顔 (visage)」だとされている⁸。さらにレヴィナスにおけるこの二種類の隠喩の評価を追いつつ、Del Mastro は「世界に遺された諸痕跡」⁹であるような事物の痕跡を超えた「本物の痕跡 (trace authentique)」¹⁰を「絶対的隠喩」に帰する¹¹。顔を「絶対的隠喩」と解することの妥当性や、これが如何にして超越の意味作用へと赴く思惟を可能にするのか、という点についてこれ以上は踏み込めないものの、少なくとも草稿「隠喩」における多様な隠喩の検討は、文化的な諸記号が超越を意味する痕跡ではないことを明かしている¹²。痕跡が依然として、超越との意味関係を可能にするものなのであれば、当然「痕跡」概念は再考されなければならない。

3. 〈他人〉に先立つ意味作用 —— 「他者の痕跡」(1963 年) の分析

本節では「他者の痕跡」(1963 年) を分析する。ここでレヴィナスは痕跡を、発話を介した〈他人〉の表明の仕方である「顔」が由来する「彼方 (au-

delà)」、つまり超越が意味することだと考えた上で¹³、「痕跡は他の記号のような記号ではない」(EDE, 278/291; HAH, 66/97)と主張する。実際、草稿「隠喩」の検討は、超越の意味作用へと赴く「絶対的隠喩」としての「本物の痕跡」が文化的な諸志向とは区別されるという事態を明かすものであった。つまり「他者の痕跡」における痕跡概念は、文化的な諸記号とは既に手を切りつつ、その内実の変容を被っている。故に我々がこれから取り組む問題は、以下の二つである。それは第一に、痕跡が他の記号一般に対して有する特異性とは一体如何なるものなのか、という問いである。そして第二の問いは、他人の「顔」の方が痕跡と捉え直されることで、痕跡の非直線性テーゼと、「顔」が直接的に意味を創設する、という『全体性と無限』の主張が齟齬をきたすのではないか、という問いである。

意味されたもの(signifié)と意味作用との間の関係は、痕跡において、相関関係ではなく、非直線性(irrectitude)そのものである。媒介的で間接的なものと見做されている記号と、意味されたものとの関係は、依然として直線性(rectitude)であり、というのもそれは超越を中立化する非隠蔽性(dévoilement)¹⁴であるからだ。痕跡の能意性は、我々を、直線性に変換不可能で(これは非隠蔽性と存在の秩序においては考えられぬことだが)、不可逆的な或る過去に対応する、或る側面的な(latérale)関係のうちに位置付ける。(EDE, 277/289; HAH, 64/95)

草稿「意味作用」において、「他人の痕跡」は記号の隔たりを介した象徴体系として考えられ、「砂上の足跡」と同一視されていたのだが、草稿「隠喩」では、記号間の象徴体系は、芸術や文化の復権を可能にする以上のものを持っておらず、およそ存在の彼方の超越という絶対的に〈他なるもの〉へと向かう思考を可能にするものではないと捉え直されていた。レヴィナスはこうした文化的記号の能意性に、「直線性に変換不可能」なものとしての痕跡の能意性を対置する。これは「痕跡としての痕跡」(EDE, 281/294; HAH, 68/101)という語によって、単なる象徴関係に過ぎない諸事物の痕跡とは区別される。以下では、レヴィナス自身が用いた石の例を検討することで、この特異な痕跡概念をいっそう明確に理解し、ひいては「痕跡」がもつ、一般的な諸記号に対する固有性を明かす(第一の問いへの答え)。

痕跡におけるこの状況——これを我々は彼性(illéité)と呼んだ——は、諸事物の中で始まるのではない。なぜなら諸事物は、それら自身によって痕跡を残さず、諸々の結果を生ぜしめる、つまり世界の中にとどまるからである。一つの石が或る別の石に擦り傷を付けた。その擦り傷は確かに、一つの痕跡と見做されうる。しかし実際には、石を手にした人間がいなければ、擦り傷は一つの結果でしかない。山火事が雷の痕跡でないのと同様に、その擦り傷は痕跡ではない。原因と結果は、時間によって分離されていても、同じ世界に属するのだ。[中略]すなわち、諸事物を特徴付ける諸痕跡は、現前のこの充実の一部を成すのであって、それら痕跡の歴史には過去がないのである。痕跡としての痕跡は、単に過去に至るだけではなく、痕跡としての痕跡は、なおも私の時間の内で整置される如何なる過去、如何なる未来よりも遠い過去への、永遠が浮かび上がる〈他なるもの〉の過去——全ての時間を一つに集める絶対的過去——への、過ぎ行き(passe)そのものなのである。(EDE, 281/294; HAH, 68f./101f.)

たとえば石の擦り傷が、ヴェスビオ山の噴火によって付いたとする。この場合、ヴェスビオ山の噴火という出来事と、傷付いた石の発見という出来事との間には、当然時間的に隔たりがある。しかしこれらは同じ世界の連続した時間におけるふたつの出来事であり、我々がこの石を手にしたところで、同じ世界の過去を単に想起、或いは想像する可能性をもつに過ぎない。同様に、獣の足跡や犯罪者の遺留品、古代文明の遺跡など諸事物の痕跡は、同じ世界における過去を指意するだけである。「誰かの痕跡はその者の過去を指意するのではなく」(EDE, 282/295; HAH, 69/102) とあるように、痕跡が遺された出来事が生じた過去は、意識において再現前化されうる時間に過ぎず、「絶対的過去」ではあり得ない。

これに対して、絶対的に〈他なるもの〉、すなわち超越の意味作用が遺した「痕跡としての痕跡」は特異な痕跡であって、「なおも私の時間のうちで整理される」ような、潜在的な諸地平を指すものではあり得ない。これが第一の問いへの応答となろう。この痕跡は、他の諸記号とは異なり、現前に決して回収されることのない、「全ての時間の一つに集める絶対的過去」へと赴かせる。そしてあらゆる時間はこの際、現在ではなく、意識に回収不可能なこの「絶対的過去」に帰されることとなる。

続いて第二の課題、すなわち「顔」における直接的な意味創設との関係を問おう。

意味する (*signifier*) が指標する (*indiquer*) に等しいとしたら、顔は意味しないもの (*insignifiant*) であることとなるだろう¹⁵。[中略]〈他人〉は絶対的に〈不在なるもの (Absent)〉から生ずる。しかし、〈他人〉と、他人がそこから到来するところの絶対的に〈不在なるもの〉との関係は、この〈不在なるもの〉を指標しないし、暴露 (*révéler*) しない。(EDE, 276/288; HAH, 63/93)

この引用箇所、レヴィナスは「意味する」を「指標する」から区別する。隠喩をはじめとする文化的な諸記号は「他性の中性化」、つまり超越を普遍や抽象へと一元化するが故に、草稿「隠喩」の時点で批判的に捉え直されていた。換言すれば、指標作用として解されうる全ての意味作用は、それが非直線的なものであれ、決して超越の意味作用ではない。痕跡は何かを一意的に指標しない。ここから第二の問いへの応答、すなわち「痕跡」概念の非直線性テーゼと、顔の直接的な意味創設とを矛盾なく結びつける仕方が示される。それは超越を絶対的に〈不在なるもの〉と考え、この不在なる超越それ自体を〈他人〉の顔に先立つ意味作用／意味内容 (*signification*) として捉える、というものである。

『全体性と無限』において、顔はいかなる媒介もない、〈他人〉の直接的な現出であり、その意味創設においては意味作用たる〈他人〉と、意味されたものたる顔との如何なる志向的隔たりもないのであった¹⁶。そして草稿「意味作用」では、直接的な意味創設である顔にあらざる場合においても、主体が超越から意味を受け取る可能性として、二次的な象徴関係である「他人の記号」としての痕跡が検討されていた。しかし草稿「隠喩」においては、非直線的な象徴関係である隠喩ですらも、超越を中立化せしめるものとして棄却され、文化的な諸事物の痕跡とは別の能意性が示唆される。そして「他者の痕跡」では、記号による媒介なき直接的な〈他人〉との邂逅の場である顔の方が「痕跡」と捉え直された上で、「〈他人〉は絶対的に〈不在なるもの〉から生ずる」(EDE, 276/288; HAH, 63/93) と主張される。この「痕跡」が意味

する〈不在なるもの〉としての超越は、「顔がそこから到来するところの彼方（*au-delà*）」（*EDE*, 277/290; *HAH*, 65/96）であると捉えられるように、「顔」を直接的に創設する〈他人〉よりも古き意味作用である。

だが、この「存在の彼方」ないし〈不在なるもの〉としての超越の意味作用／意味内容それ自体をもはや直接的に問うことはできない。というのも先に述べた通り、「超越」「神」といった隠喩自体は「完全に他である他性への移行を表すのではない」（*Æ2*, 339/352）ものとして捉えられたからである。さらに先行研究が指摘するように、超越の意味作用／意味内容それ自体も否定的文脈、すなわち超越の自同性を前提とした「不在」や「彼方」という語を用いてしか言表できない¹⁷。超越の意味作用それ自体へと赴く思惟を言表することのこうした不可能性から、「他者の痕跡」のレヴィナスの関心は、痕跡において超越が意味する仕方を記述することへと向かっている。そしてそれはもはや、存在論的言語に従属するようなあらゆる記号意味論とは手を切った「人称的秩序」（*EDE*, 272）において、顔の表出に居合わせる二人称の〈他人〉に先立つ「三人称の彼性（*illéité*）」（*EDE*, 278/290; *HAH*, 65/96）と名付けられることとなる。

〈他人〉に先立つ意味作用としての超越に人称性を与え、その能意性を論じるといふ議論の方向性は、神学的な諸命題を思い起こさせるかもしれない。しかしこうした議論は、「世界の背後の或る「別の世界」」（*EDE*, 275/286; *HAH*, 62/91f.）、すなわち現れが由来するところの、何らかの背面世界を念頭に置いたものではないし、超越ないし神の実在性を素朴に肯定するような議論ではもちろんあり得ない。この「彼方」は「非隠蔽性（*dévoilement*）と隠蔽（*dissimulation*）とから徹底的に逃れている、或る《不在であること（*absence*）》」（*EDE*, 275/287; *HAH*, 63/92）を意味するのであって、痕跡が意味する「彼方」の《不在であること》は、いかなる存在論的な二項対立にも属さぬ第三項なのである。

結論

『全体性と無限』第三章で、〈他人〉の顔が直接的な意味創設であると主張したレヴィナスは、その後、顔の現出がない状況で、如何にして我々は超越の意味作用へと向かうことができるのか、という問題に着手した。草稿「意味作用」では、意味作用と意味されたものの非直線性を主張し、「痕跡」の語を用いて直接性なき他人の現前を論じたが、この痕跡は芸術作品や道具、言葉に代表される、他人の文化的諸記号を念頭に置いたものであった。

他方で草稿「隠喩」においては、超越の中立化、ひいては価値低下に与するものとして、記号間の象徴関係である隠喩を批判したが、その理由は「文化的な志向」として芸術作品や文化といった戯れの超越を復権させるものに過ぎないから、というものであった。「痕跡」概念が超越の意味作用と非直線的な関係を有していたとしても、その実態が文化的な諸記号にすぎないのならば、これらは「戯れの超越」しか意味しない。それ故に、意味作用と意味されたものとの非直線的な関係それ自体は、超越の意味作用を問うに際して必要条件でしかないということになり、痕跡を論じるには不十分である。ここで彼は、超越の意味作用へと赴く志向をあらゆる象徴関係から外し、この志向を可能にする痕跡も、現前を構成する潜在的な諸地平からは区別した。

「他者の痕跡」においては、〈他人〉の顔が「痕跡としての痕跡」として捉え直され、これが〈不在なるもの〉という彼方に由来する、と主張されるようになった。これは意味の直接的創設であった〈他人〉の顔に先立つ意味作

用として、〈不在なるもの〉たる超越を位置付ける作業である。加えてこの論文の記述は、草稿「隠喩」にもみられた、超越の意味作用／意味内容それ自体を言表することの不可能性の問題を踏まえている。結果的にレヴィナスは、存在論的言語から距離を取るべく、普遍化や中立化に汲み尽くされ得ない超越の能意性に「彼性」という人称的秩序を与えることとなった。顔の現出なき場における超越の意味作用を問う、という課題から出発したレヴィナスだが、「他者の痕跡」においてはむしろ、『全体性と無限』における顔の議論を痕跡論へと接続することとなった。「痕跡」概念の内実の変化を追うという本稿の目的は、以上のようにして達せられたといえる。

参考文献

一次文献からの引用・参照については略号を使用し、邦訳のあるものは原書／邦訳の順で頁数を記載した。本文中の引用は、既存の邦訳を参考にしつつ、全て執筆者が新たに訳出したものである。

【一次文献】

Lévinas, Emmanuel. *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité* (1961). Livre de poche, 2000. (=TI)

〔藤岡俊博訳『全体性と無限』講談社、2020年〕

——. *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger* (1967). J.Vrin, 2013. (=EDE)

〔佐藤真理人他訳『実存の発見』法政大学出版局、1996年〕

——. *Humanisme de l'autre homme* (1972). Livre de poche, 1990. (=HAH)

小林康夫訳『他者のユマニスム』書肆風の薔薇（現 水声社）、1990年〕

——. *Œuvre 2 : Parole et silence – et autres conférences inédites au Collège philosophique*. Grasset, 2011. (=Œ2)

〔藤岡俊博他訳『レヴィナス著作集 2 哲学コレーージュ講演集』法政大学出版局、2016年〕

Merleau-Ponty, Maurice. *Signe* (1960). Gallimard, 1960.

〔廣瀬浩司訳『精選 シーニュ』筑摩書房、2020年〕

【二次文献】

Calin, Rodolph. «La Métaphore absolu. Un faux départ vers l'autrement qu'être». in *Chaiers de philosophie de l'Université de Caen*, n° 49, Presses Universitaires de Caen, 2012, pp. 125-142.

Del Mastro, Cesare. *La métaphore chez Levinas : une philosophie de la vulnérabilité* (2012). Lessius, 2013.

犬飼智仁（2019）「レヴィナスにおけるメタファー論」『文学研究論集』明治大学大学院、第50号、15–26頁。

上田和彦（2001）「痕跡の両義性—エマニュエル・レヴィナスの「痕跡」について」『言語態』東京大学駒場言語態研究会、第2号、26–44頁。

関根小織（2007）『レヴィナスと現れないものの現象学—フッサール・ハイデガー・デリダとともに反して—』晃洋書房。

村上暁子（2012）「レヴィナスにおける〈彼〉の人称的秩序による他性の意味論—デリダの批判をめぐって」『フランス哲学・思想研究』日仏哲学会、第17号、142–150頁。

¹ 基本的に *signification* は「意味作用」と訳出したが、一部の引用箇所では文意が伝わりにくくなることから、適宜「意味内容」の訳語を用いている。

² この時期のレヴィナスの活動を簡単に示しておく、『全体性と無限』が国家博士号請求論文の審査を受ける前の 1961 年 2 月 28 日に「意味作用」と題した講演が行われており、その中で「痕跡」の語が用いられている。そして翌年 2 月 26 日には、講演「隠喩」が行われている。更に 63 年 1 月 16 日－17 日に行われた講演「意味とは何か」は、論文「意味作用と意味」（1964 年）の前半部を成すものである。そして「意味作用と意味」の後半部は、同年 5 月 20 日の講演「痕跡」に基づいた同年 9 月の論文「他者の痕跡」の組み入れである。cf. *Æ2*, 368f./380.

³ もっともこの点については、同論が『全体性と無限』公刊直後の草稿群を含む『著作集』第二巻の出版以前に著されたものであるため、致し方ないところである。だが今日、レヴィナスの「痕跡」論を再考する際に、「レヴィナスが「痕跡」という考え方を示した出発点」（上田, 2001: 31）を論文「意味作用と意味」（1964 年）に求めるのは適切ではない。

⁴ レヴィナスがこの「側面的に (*latéral*)」という語を用いるとき、念頭に置かれているのはメルロ＝ポンティである。この講演「意味作用」の前年に出版された論集『シーニュ』（1960 年）にも収められた論考「間接的言語と沈黙の声 (*Le langage indirect et les voix du silence*)」（1952 年）は、ソシュールの『一般言語学講義』における記号概念の検討から始まる。ここでメルロ＝ポンティは、意味が諸記号間の相互関係によってのみ生ずると述べるのだが、こうした記号間の関係は「記号から記号への側面的な関係 (*rapport latéral*)」（Merleau-Ponty, 1960: 53/104）と呼ばれている。表現的なパロールについても、直接的な意味を一義的に引き出すことのない、「語の間で湧出する側面的ないしは斜交的 (*oblique*) な意味」(*op. cit.*, 58/113) があるとされる。

⁵ Cf. *TI*, 43/72.

⁶ Cf. *Æ2*, 325/337.

⁷ 関根小織は、『全体性と無限』の「全体性」概念を二分した上で、レヴィナスが「中立的なもの」に〈他なるもの〉の他性や特異性が解消されてしまうような「全体性」を批判する際、念頭に置かれているのはハイデガー存在論であると主張している。cf. 関根 (2007:49ff.)

⁸ Cf. Calin (2012:139) ; Del Mastro (2013:131f.) .

⁹ Del Mastro (2013:141) .

¹⁰ *Ibid.*

¹¹ Cf. *Ibid.*, 140f.

¹² 痕跡概念の展開を追うという本論の論旨に鑑みた際にこれ以上の言及はできないが、カランは適切にも「絶対的隠喩」が痕跡の条件としては不十分であったが故に、その後用いられなくなっていることを指摘している。他方で犬飼智仁はこのカランの研究を検討しつつ、「解釈学と彼方」（1977 年）といった後年の論文にも隠喩への関心が依然として残っていることを示した上で、その積極的な意義を考察している。cf. Calin (2012:141) ; 犬飼 (2019)

¹³ Cf. *EDE* 276/288f.

¹⁴ 先に述べた通り、超越の中立化を語る際にレヴィナスが念頭に置くのはハイデガーである。『存在と時間』刊行直後のハイデガーは、存在者の非隠蔽性こそが真理（アレーテイア）であると考えていた。故にここで *dévoilement* は *Entdecktheit* の訳語と考え、「非隠蔽性」と訳す。

¹⁵ 邦訳注でも触れられているが、ここで念頭に置かれているのは明らかに『論理学研究』第二巻冒頭での、認識論的現象学に係るフッサールの議論であり、記号の「意味する (*bedeuten*, *signifier*)」ことたる表現 (*Ausdruck*, *expression*) と、単なる指標 (*Anzeichen*, *indice*) との区別の問題である。但し、レヴィナスがここで本来の *signifier* を他人の「顔」の自己表現に限定している、という訳者たち

の解釈に我々は同意しない。むしろ彼が考える根源的な意味作用は、絶対的に〈他なるもの〉たる超越の意味作用だけであって、これから見るように、この超越の意味作用は顔に先立つ意味原理として考えられる。むしろこの根源的な意味作用は、指標でないからといって、単なる表現でもなかろう。cf. 佐藤他訳 (1996: 391; 415)

¹⁶ Cf. *TI*, 44/74.

¹⁷ Cf. 村上 (2012:143f.)